

底が突き抜けた」時代の歩き方 502

時間は河のように流れているか

時間に関するさまざまな言説を以下に拾ってみよう。

- 「飛ぶ矢は飛んでいる間中、どの瞬間も止まっている」(古代ギリシャ、哲学者ゼノン)
- 「三つの時間、すなわち過去のものの現在、現在のものの現在、未来のものの現在が存在するというほうがおそらく正しいだろう。じっさい、これらのものは心のうちにいわば三つのものとして存在し、心以外にわたしはそれらのものを認めないのである。すなわち過去のものの現在は記憶であり、現在のものの現在は直覚であり、未来のものの現在は期待である」(聖アウグスティヌス『告白』岩波文庫)
- 「どのような過程も、『時間の過程』 - そのようなものは存在しない - と比較することはできない。ある過程は、別な過程〔たとえば、クロノメーターの歩み〕と比較できるだけである」(ウィトゲンシュタイン『論理哲学論』中公クラシックス。「クロノメーター」とは、とくに精密につくられた携帯用のぜんまい時計で、天文観測や船舶の位置測定などに利用された)
- 「為すべきを尽くし心の安んじた所、それが死所」
「いつとき草虫の半生の命もあれば しょうはく松柏の数百年の命もある。しかし天地の悠久に比べれば松柏も一時の蠅だ」(吉田松陰)
- 「哲学の開始から現在まで絶えず人々を悩ませておきながら、いまなお不可解の霧に包まれたままにあるのが『時間』の概念である」
「『時間の流れ』とは結局のところ内容空虚な錯誤であると断定せざるをえない」(大森 莊蔵『時は流れず』青土社)
- 「時間は実在するかという問いは、失効する」(入不二基義『時間は実在するか』講談社現代新書)
- 「時間の観念について非常に多くの言葉が書かれ、また語られているけれども、単に、持続を測る、出来事の契機の数と位置を表す、という観点から時間を理解することに、私は何の困難も見出さないのである」(チャールズ・H・ホランド『時間とは何か』青土社)
- (本川達雄『ゾウの時間 ネズミの時間』に対して)「ネズミはゾウに比べて『時間が早く流れる』という言い方には、人間の用いる時計をもとにした視点と、動物の心臓や呼吸を基準運動にした視点との、二重の視点が併用されている」
「生命をもつものの『生きる量』とは、天体運動という生物に無関係なものに由来する時計時間によって示されるだけではなく、生物に固有の基準もあってしかるべきではないかという要求が、そこに潜んでいる」(植村恒一郎『時間の本性』勁草書房)

- 「私が、最も強調したいこと、それは『まだない』未来は『もうない』過去とはその『なさ』がまるで違うということです」

「私は本書で現在と過去との二元論を採用したいのです。現在と過去との決定的差異を見据えることが時間論のすべてだと言いたい。では、未来とは何か。それは、私の考えでは『まだない』のではなく、じつはありとあらゆる意味で『ない』、つまり完全な無なのです」(中島義道『時間を哲学する』講談社現代新書)

- 文芸評論家の三浦雅士が哲学者木田元の『偶然性と運命』(岩波新書)に触れて、01・7・18付読売でこう言及している。ハイデガー哲学のツアイティグングという言葉がこれまで「時熟」と訳されてきたことについて、「ハイデガーのもとで学び、その信頼も篤かった九鬼さんの言うことだから間違いないだろうというので、すべての邦訳がこれを踏襲したということであろうが、いくら九鬼さんの考えた訳語でも、これではなんのこともさっぱり分からない。時熟するとか時熟とか言われて、お分かりになる方がおられるだろうか」と疑問を呈して、木田元は「時熟」の代わりに「おのれを時間化する」と訳したという。(因みに、「九鬼さん」とは哲学者の九鬼周造のこと)。この訳語が《『偶然性と運命』の重要な鍵になっている》という。

《動物は現在を生きるだけだが、人間は、暇だったからか神経細胞が増えすぎたからか、とにかくその現在をじっと見つめて、そこから過去と未来を分化させてしまった。過去を背負い未来へ向かって生きるこの現在こそが自分である、つまり自分とは時間であると考えようになってしまった。これがつまり人間は「おのれを時間化する」存在だということなのだ。ハイデガーさんの偉さが分かってくる説明だ。/木田さんは、偶然性も運命も「おのれを時間化する」人間に特有の現象なんだという。文学とは無関係など言っただけはいけない。おのれを時間化するのは、おのれを物語化すること。文学の核心である。》

- 人間が「時間」に関心を持つ《まず一番大きな理由は、我々一人一人がこの世界に生まれ、生き、そして死ぬという事実、すなわち人間の有限性にある。「過去」「現在」「未来」という名の時間とは、いったい何なのか。哲学で盛んに議論されているが、まだ決着をみていない。そのような時間が「実在する」のかどうかすら疑問に付されている(この問題は専門的には「マクタガートのパラドックス」と呼ばれる)。「過去」「現在」「未来」にはまともな定義がないのである。

自分が生まれる以前が「過去」、生きている間が「現在」、自分の死後が「未来」であるという素朴な考え方もできるだろう。そして自分の人生の全体である「現在」が、「昨日」「今日」「明日」のような、さらに小さな「過去」「現在」「未来」に分化する。

時計で忙しく生活する我々には、「今日」の内部にさらに狭い「この今」という「現在」がある。こうした小さな「現在」の総計が自分の一生なのだから、時間は自分の誕生と死によって定義されているとも言える。

では、自分の「一生の長さ」とは何であろうか。「80歳」のように、自分の年齢によって客観的に決まる長さであると、多くの人は思い込んでいる。が、果たしてそうか。(中略)

我々は自分の年齢を、体重や身長と同じように、自分の属性のように考えて、履歴書に書き込んで疑わない。しかし、たとえば誕生日に「自分が20歳になる」というとき、「20歳になる」ことは自分に生じる出来事なのだろうか。誕生日には自分の身体には何事も起きない。起きたのは、地球が太陽の周りを私が生まれてから20回公転したということ、つまり地球という天体に生じた出来事である。身長や体重は私の身体を測定して得られた結果だから、私の属性と言ってよい。が、天体の回転数は私の身体とは無関係だから、それがあつた日を境に私の属性になる（今日で「20歳になる」）のは何かおかしい。

問題は、天体運動という自分に外的な出来事によって、時間の長さが一律に計られることにあつた。天体運動がゾウとネズミの「人生の長さ」を一律に計るのはおかしい。ならば、それが一人一人生き方が違う我々の「人生の長さ」を一律に決めるのもおかしくはないか。我々の人生は、そこに含まれる多様な「質」こそが重要で、そうした「質」に関わる内的な基準によって計られてもよいはずだ。天体の回転数だけでなく、生きること自身の内部から生み出される「私の本当の年齢」があつてもよいのではないか。

子供の頃、次のような疑問を感じた人は多いだろう。なぜ自分はこの両親の子として、この時代、この国に生まれたのか。なぜ江戸時代ではなく、今生きているのか。なぜフランス人ではなく日本人なのか - この疑問は自然ではあつたが、奇妙な点がある。

もし仮に、自分が「この私」ではなく、江戸時代に実際に存在した現実の誰かだったとしたら、「その人」は二百年も後に生まれている「この私 = 植村」のことを知らない。だから「その人」は、「自分は、昭和に生まれるはずだった植村が、そうなる代りに江戸時代に生まれた人間だ」という意識を持つことはできない。

だが、こうした矛盾にもかかわらず、子供が持つこの疑問は、時間と存在に関わるもっとも本質的な問いである。それは、他者を理解するということは、たとえ部分的であつても、他者に「成り代わる」という意識を含むからである。つまり我々はみな、自分の「今ここ」という「視点」の中にいながら、同時にその外部に出ているという不思議な在り方をしている。「この今」を生きる私は、一方では、「過去」や「未来」の自分という「他者」でもある。「タイムトラベル」の夢が語るのは、人間存在のもつこの根本的な不思議さなのである。

哲学は、科学よりはずっと文学や芸術に近い。哲学は、この世界に生まれ、生き、死ぬ私という視点を根底に置いているからである。哲学は理論分析や客観的真理を重視する。にもかかわらずその根源には、「今ここ」という唯一の視点の中に全世界、全宇宙、全歴史を捉え切つてしまいたいという、やみがたい衝動がある。何のために。それは、「今ここ」にいる自己を受容するためである。

多くの偶然性に晒されている我々個人は、「この自分」をなかなか受け入れられない。にもかかわらず、結局は「今ここ」にいる自己をどこかで受容しなければならない。それを「いやいや」ではなく、自由な行為として行おうとするところに、哲学が時間と格闘する理由がある。》（「カント哲学・時間論」研究 植村恒一郎「哲学と時間 格闘す

るわけ」03・3・12付朝日)

ここで提出されている問題のひとつは、《天体運動という自分に外的な出来事によって、時間の長さが一律に計られる》ために、《それが一人一人生き方が違う我々の「人生の長さ」を一律に決める》ことのおかしさ、である。なぜ、おかしく感じるのかといえば、《誕生日に「自分が20歳になる」ことは自分に生じる出来事》でもなんでもなく、単に《地球が太陽の周りを私が生まれてから20回公転した》だけのことなのに、あたかも《自分の年齢を、体重や身長と同じように、自分の属性のように考えて》いるからだ。体重や身長は自分の属性ではあっても、年齢は自分の属性ではない。その通りである。年齢は属性ではなく、「天体の回転数」にほかならないから、単なる基準にしかすぎない。つまり、これまでどれだけの「天体の回転数」に付き合ってきたか、今後どれだけの「天体の回転数」に付き合うことができるのだろう、ということだ。

我々の年齢というものが単なる「天体の回転数」にほかならないとすれば、そしてこの「天体の回転数」は万人に等しいとすれば、当然ながら、身長や体重が各々異なるように、この「天体の回転数」に自分はどのように付き合ってきたか、という疑問にふと襲われることになったとしても、別に不思議ではない。なるほど天体運動の回転数は万人にとって不変であるかもしれないが、その天体運動をどのように受けとめているのか、あるいは無関心であるのかは、それぞれに異なる。そこに誕生日に「自分が20歳になる」ことを、「自分に生じる出来事」として受けとめたいとする欲求の根源がある。誰のものでもない、自分にとっての20歳という意識である。《我々の人生は、そこに含まれる多様な「質」こそが重要で、そうした「質」に関わる内的な基準によって計られてもよいはずだ。天体の回転数だけでなく、生きること自身の内部から生み出される「私の本当の年齢」があってもよいのではないか》という欲求が、ふつふつと沸き上がってくる。

自分はどのように生きてきたのか、という問いに刻み込まれるようにして、確かに「私の本当の年齢」というよりも、自分に属する、自分だけの年齢を希求する気持が誰にもあるのかもしれないが、だが、その「私の本当の年齢」なるものはどこにあるのだろうか。もちろん、天体運動にはない。「私の本当の年齢」が自分の外に見出される筈がない。ならば、それは自分の内にしかないことになる。では自分の内のどこにあるのかと探しても、どこにも見当たらない。「私の本当の年齢」は探すものではなく、自分がつくりだす、自分が隆起させる時間のなかにしかないからだ。要するに、「私の本当の年齢」は自分がつくりださなければ、どこにもない。「天体の回転数」が自分に限られているなかで、自分だけが生きる時間をどのように作りだしてきたかによって、「私の本当の年齢」が誰でもなく、自分によって数えられていくのである。

●《時間が遠い過去から今を経て無限の未来へ棒のようにつづいているという時間観だけは持ったことがなかった。暦、カレンダー、時計で計測される機械的、数量的時間は、人間の外にある物、社会生活を営む上でやむを得ず導入された時間であり、生きるということと関係がないと信じていた。(中略)

人間にとっての時間は、今自分が生きている時間しかない、と考えるのが文学である。文学をやる人間にとって、何千年前の人間も今自分の目の前に立つ人間だと、わたしは若い頃から考えてきた。

だから唐詩などで「きのうの紅顔、今日の白髪」などという発想を見かけると、そういう感傷はおれには無縁だ、と思った。「少年老い易く、学成り難し」式の発想は、子供のころからきらいだった。わたしは子供のころから、今自分が生きている時以外に時間はない、と考える傾きがあった。

『正法眼蔵』の中の次のような時間観に出会ったとき衝撃は受けたけれども、同時にこれこそ自分の求めたものだ、と直覚したのは、昔からそんなふう^{ひこ}に時間を感じていたせいだろう。

時は飛去^{ひこ}するとのみ解会^{げえ}すべからず、飛去は時の能とのみは学すべからず。(有時)

経過するものが時である、時とは経過してゆくばかりと考えてはならない。過ぎ去る、経過することが時の本質ではない。というのだから、これはふつうわれわれが抱く時間観を真向から否定するもので、わたしも初めてこの文章に出会ったとき、がんとやられたくらいの衝撃を受けた。

いったいこれは何だ、と思った。時は過ぎ去るとばかり考えてはならぬというなら、どう考えればいいのか。(中略)

修行者はつねに絶対的なものに相対して生きている。それを仏と呼び、神と呼んでもいいが、修行者はそのものと相対し、そのものに保持され、生かされているとき、永遠なるいのちの充溢の中にいる。永遠なるそのいのちにみたされたとき、自分は個別的な自己であってしかも自己を超えた法そのものである。つねにそういう法そのものに成りきっている存在にとって、時間が経過しようか？ 彼にあるのはつねに永遠なる「今ココニ」の時だけではないのか？

道元はその「今ココニ」を「而今^{しさん}」という言葉で表現している。道元にとって存在が時間なのである。存在がそのように永遠なる「今ココニ」として生きながら、ごろごろと転がってゆくところに時間が生じるのであって、その時間はだから「有時」、「吾有時」にほかならぬ。そのどこをとっても同質の、存在の発露にほかならぬ。

三頭八臂^{さんとうはつひ}はきのふの時なり、丈六八尺はけふの時なり。しかあれども、その昨今の道理、たゞこれ山^{じきにゆう}のなかに直入して、千峰万峰をみわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂もすなはちわが有時にて一^{いつきよう}経^{ひほう}す、彼方にあるににたれども而今^{しさん}なり。丈六八尺もすなはちわが有時にて一^{ひしよ}経^{しさん}す、彼処にあるににたれども而今なり。

自分はあるときは三頭八臂の化物だったこともある。丈六八尺の仏身だったこともある。自分はある山をすぎ、この川を渡った。が、今はこの安楽な場所^{さんとうはつひ}にいて、あの山河も、丈六八尺も、三頭の八臂も遠い過去のことだ。と、そうなるのが、常人の考え方である。だが、真人はそうは考えない。真人にとってはそのすべてが自己であり、「今ココニ」であるのだ。すべての時が、ずかずかと山の中に入って行って、千峰万峰を見渡ししている「今ココニ」である。遠くにあるようだが「而今」であり、遠い過去のことの

ようだが「而今」なのだ。

そんなふうに道元の言葉をわたしは解し、そう解したときすべてはきわめて自明な、納得しうるものになった。(中略)千年前の唐詩やホメーロスを読んでも、それはわたしにとって「今ココニ」ある体験であった。文学の中に時間の経過はない。すべてが「彼方にあるにたれど而今なり」なのであった。(中略)

人間はたんに生理的存在だけではない。精神としての生をも生きるのが人間であり、その精神の生に老いも死もなく、すべてが「今ココニ」の時である。それは生死を超越している。大事なのは、生の根源に直入できるかどうかということだけだ。》

加島祥造が訳してみせる《老子の説くところは、道元の説くところときわめて近いというか、同じ土壌から発せられているように思われた。どちらも、万物が分化して対象となる以前の根源のところを志向し、それを丸ごと全部とらえようとしている。西洋的思考は、その根源が分化して、主観客観に分かれ、対象化した存在を分析、計測、数量化してとらえようとする。時間だって、本来なら存在から分離しえないものを、対象化、数量化するから、あたかも棒のように連なる時間観が生じる。が、東洋の考え方は、老子も道元も、存在も宇宙も分化しない—であるところをじかにひつつかみ、それと一体化しようとする。

^{タオ}道の働きは、なによりもまず、
空っぽから始まる。それは
いくら掬んでも掬みつくせない
不思議な深い淵とも言えて、
すべてのものの出てくる源だ。(加島訳)

その何もない源泉を、丸ごとつかむ。それと一体となる。そこにのみ宇宙と精神の真実が実現する。客体化、対象化しないで、それ以前の根源を身心の全体で把握する。そこへ戻る。「あの非存在、名のない領域へ。」それを老子は^{タオ}道と呼んでいる。

都会では分刻みのスケジュールにしばられ、情報と時間に追われ、心は空っぽで、外なる物と対応することで1日が過ぎてゆく。時間も自己も細分化されている。それでは真の自己を取り戻すことなど出来るわけもなく、一生はラチもないことでの奔走の中に終る。

真の自己を取り戻すには、もう一度そういう細分化された生活を捨て、自然の中へ、宇宙の根源へ戻らねばならない。そのことを老子が教える、とわたしは思った。現実の奥にひそむ、目に見えぬ根源世界が^{タオ}道なのである。

『老子』全体のなかにとくに道元のような時間論はないけれども、天地の生まれてくる以前の根源にかえれというとき、その時間観はおのずから道元と同じものにならざるをえないだろう、とわたしは思った。『老子』の開巻第一頁に道の定義がある。

《「名」としてあらわせないところに真実の「名」はひそみ、そこに真実の「道」があって、それこそが、天と地との生まれ出てくる唯一の始源である。そして、天と地というように「名」としてあらわせるようになったところが、さまざまな万物の生まれ出て

くる母胎である。

だから、人は常に変わりなく無欲で純粹であれば、その微妙な唯一の始源を認識できるのだが、いつも変わりなく欲望のとりこになっているのでは、差別と対立にみちたその末端の現象がわかるだけだ。》（金谷治『老子』講談社学術文庫）

絶対的なあるものに相対し、そのいのちに保持され、充溢されているとき、そこにあるのは永遠の「今ココニ」の充実した時だけであって、いわゆる時間は経過しない。肉体はそのあいだにも老い衰えるかもしれないが、精神の充溢の時は去らない。そういう世界があるのである。東洋の古代文化はその根源を志向することで共通していた。

老子や道元をよみながらわたしには、そういう二元論以前の一なる根元をふたたび取り戻すことによってしか、分化しつくした（デジタル化した）今の文明を離れて、人間がもう一度いのち溢れる生を取り戻す道はないのではないかと、という気がしたのであった。》（中野孝次「老子の時間、道元の時間」『図書』00・7）

「今ココニ」存在していることが永遠の時間にほかならないということが、道元や老子の言葉として説かれているとあってよい。「今ココニ」以外の時間はどこにもないのであって、「今ココニ」存在しえていなければ、人間は外に流れる社会的な時間に細分化されていく。では「今ココニ」存在しえているということは、どのような状態であるのか。前の植村氏によれば、『「今ここ」にいる自己を受容する』ことができている状態にほかならない。それはいかに可能なことであるのか。その問いに対して中野氏にとっての道元は、修行者は「絶対的なもの」と相対することによって、『そのものに保持され、生かされているとき、永遠なるいのちの充溢の中にいる。永遠なるそのいのちにみたされたとき、自分は個別的な自己であってしかも自己を超えた法そのものである』と答えているように思われる。

『「今ここ」にいる自己を受容する』ことは、「絶対的なもの」と相対することによって、『そのものに保持され、生かされている』ことが感じられるようにならなければならないということだ。自己単独の力だけでは、『「今ここ」にいる自分を受容する』ことはできない。なぜか。おそらく『自分は個別的な自己』として限定されているからだ。『「今ここ」にいる自己を受容する』ことができるのは、自分を超える水準においてしか可能にならないということだろう。つまり、自分は自分を超えるものを感じないかぎり、『「今ここ」にいる自己を受容する』ことはできない。老子であれば、『天地の生まれてくる以前の根源にかえれ』、『その何もない源泉を、丸ごとつか』んで、『それと一体となれ』、と説く。そんなことが人間に可能かどうかではなく、そのようになるようにして生きていくなら、「永遠なるいのち」に満たされる、ということだ。そのとき、『永遠の「今ココニ」の充実した時』を味わうことができる。すなわち、『「今ここ」にいる自己を受容する』ことができる、ということだろう。

●『時間というものは、とグリニッジ天文台の観測室でアウステルリッツは語った。われわれの発明の中でも飛び抜けて人工的なものなのです。時間は、地軸を中心とした地

球の自転に準拠しているけれども、だからといってたとえば樹の生長とか、石灰石の溶解する期間を基準にした計測法よりも恣意的でないとは、けっしていえません。そもそも、われわれが拠り所とするその一太陽日すら、正確な尺度であるとはいえないのです。時間を計測するためには、運動速度が変化せず、公転面が赤道に対して傾いてもない、架空の 平均太陽日 というものを仮定しなければならないのですから。ニュートンがもし、とアウステルリッツは、窓越しに、通称犬 ^{アイズ・オブ・ドッグス} の 島をU字に囲んで流れる入り陽にきらきらときらめく河面を指さしながら言った。ニュートンがもし、時間とはテムズの流れのようなものだとはほんとうに考えていたなら、時間の源はどこにあり、最後にはどの海に注ぐのでしょうか。周知のとおりどんな河の両側にも岸边がある。それなら時間の岸边とはなんでしょう。流体でかなり重くて透明である、そういう水の性質に対応する特質が時間にはあるのでしょうか。時間の波に攪われるものと、時間がけっして触れないものとの違いは？ 光の時間と闇の時間を同じ円周上に示すとはどういうことなのか。あるところではとこしえにとどまり鳴りをしずめる時間が、別のところでは怒濤を打って押し寄せるのはなぜか。ひょっとすると、とアウステルリッツは語った。過去何百年、何千年にわたって、じつは時間には同時性がなかった、そうは言えないでしょうか？ 時間がどこにもかしこにも延び広がったのは、そう遠い昔のことではないのです。地域によっては今でも、時間よりも、天候のような計量不可能な次元を基準に生活を営んでいるところがあるのではありませんか。そうした次元は、線的な均一性とは無縁で、先へ先へと進みつづけるのではなく、渦巻き、澱み、堰を切り、たえずかたちを変えながら還り来て、またいずこかへ広がっていくのです。そのむかし、海を隔てた未発見の大陸は、とアウステルリッツは語った。そしてつい最近まではわが国の取り残され忘れ去られた地域は、 時の外にある とされてきました、けれどもロンドンのような時間が支配する巨大都市にあってすら、今もって 時の外にある ものはあるのです。死者は時の外にいます。瀕死の人も、自宅や病院で床に臥すおびたしい病人もそうです。彼らだけではありません。身に積もる不幸がある量に達すれば、それによってその人間が過去のすべて、未来のすべてから断ち切られることがあります。げんに、とアウステルリッツは語った。私は時計というものを持つたことはありません。振り子時計も目覚まし時計も懐中時計も、ましてや腕時計など論外です。時計というものは、私にとってただもう莫迦らしいものでしかなかった。どこからどこまで嘘としか思えなかった。おそらくそれは、私自身にも判然としない衝動から、私が時間の力に逆らいつづけ、いわゆる時代の出来事に心を閉ざしてきたからなのでしょう。今にして思えば、とアウステルリッツは語った。私は時間が過ぎなければよい、過ぎなければよかった、と願っていたのです、時間を遡って時ののはじまる前までいけたらいいのに、すべてがかつてあったとおりならばいいのに、と。もっと正確に言うなら、私はあらゆる刹那が同時に併存してほしいと願っていました、歴史に語られることは真実なんかでなく、出来事はまだ起こっておらず、私たちがそれを考えたその瞬間にはじめて起こるのであってほしい。もち

ろんそうなれば、永遠の悲惨と果てのない苦痛という、絶望的な側面も口を開けてしまうのですが。 - アウステルリッツと天文台を出たのは午後三時半に近く、はやくも薄い闇がただよいはじめていた。》(W・G・ゼーバルト『アウステルリッツ』(白水社))

人々が時間に支配されるようになる一方で、時の外にあるとされてきた、つまり、時間の支配が及ばない《海を隔てた未発見の大陸》があったし、時間が支配しているロンドンにあってすら、《今もって 時の外にある ものはある》。時の外にあるものは死者であり、瀕死の人であり、おびただしい病人である。不幸に大きく申し掛かれた人間は《過去のすべて、未来のすべてから断ち切られることがありうる》。それでも、「時の外」にあっても、人間は生きているし、そこにどんな不都合も生じない。ただ時の流れの中に入っていけなくなっているだけだ。要するに、時間が支配する社会秩序に組み込まれなくなっただけだ。ここでいわれているのは、時間の発明とは時間の嘘の発明でもある、ということである。そして時間(の嘘)が発明されたとき、人間が人間を支配するには時間を支配すればよい、ということも発明された。

●《過去はどこへ行ったのか？

この問いのうちにすでに錯覚が潜んでいる。「どこ」とは場所への問いであり、われわれが知っているのは空間的な場所だからである。過去という場所がどのようなものか、じつは誰も知らないのだ。

この錯覚の根は深い。われわれは、時間を空間的なイメージでとらえる。そのうえで、それに「長い」「距離」「遠い」等の、空間に付ける言葉と同じ言葉を付ける。こうして、戦後の55年を、生命誕生以来の40億年を、はるかに歩いてきた長い道のりのようなイメージでとらえてしまうのだ。だが、時間的長さは空間的長さではない。10秒間周囲を見回してほしい。その10秒は長いであろうか？ 一分はその6倍長いであろうか？

一時間はその360倍長いであろうか？「長い」という言葉を使用しても、それがどのような長さなのか、皆目わからないのだ。

タイムトラベルも、過去が保存されているという前提に基づいている。保存されていなければ「行く」ことができないからである。だが、過去は全く保存されていないかもしれないじゃないか。

それにもかかわらず、われわれが過去に「行く」夢を断ち切れないのは、多分、想起という作用を知っているからである。想起するのは現在である。しかし、その対象は過去なのだ。これは不思議なことである。記憶物質が認められるとしても、現在存在する物質の「中に」過去が潜んでいるわけではなく、その物質と過去とをつなぐ「糸」も発見できないのだから。われわれは、ここでまたもや錯覚に陥る。過去を想起できるからには、知覚もできるに違いない、と。想起と知覚とはまるで異なったもののなのに、想起とは淡い知覚のようなものだとして錯覚してしまうのである。

こうして幾重もの錯覚にもたれかかって、われわれはシミジミ問うのだ。死んだ人々はどこへ行ってしまったのだろうか？ あの幸福な日々はどこへ行ってしまったのだら

う？　だが、「どこへ」行ったのでもないのである。》（中島義道「過去は保存されているか」00・10・17付毎日）

いうまでもなく、《時間的長さは空間的長さではない。》しかしながら、《われわれは、時間を空間的なイメージでとらえる》のは、大阪駅から新幹線に乗って3時間経過すれば、東京駅に着くのを経験しているからだ。新幹線での3時間は大阪から東京までの「距離」なのである。《10秒間周囲を見回してほしい》ではなく、10秒間歩いてほしいといえ、その10秒間に身体は移動しているだろう。そのとき、10秒間は移動距離としてあらわすことができる。秒速30万キロと決まっている光や電波が宇宙の一番遠くから地球に届くには、130億年ぐらいかかるが、距離に直すと、1230億キロの1兆倍である。宇宙のスケールでは、遠くをみることは過去をみることになるから、《死んだ人々はどこへ行ってしまったのだろうか？》と、遠くをみるまなざしで過去をみるようになるのだ。

- 《空間内ならば、行こうと思えばどこにでも行ける私たちが、すぐ近くの過去、たとえば一秒前の自分に会いに行くことはできない不思議。なぜ、人は常に「今」にだけしか存在できないのか。過去にケガをしてひどく痛かった感覚は、記憶の中に感覚の記憶として残っていても、決して「今」その感覚を生々しくそのまま痛がることはできないのは、どうしてなのか。

あるいは、タイムマシンに乗り込んで過去の世界に私が出かけたとして、到着したのが千年前だとしたら、そこに降りた時私の「今」は西暦1002年になる。私は「過去」にいるわけではない。そこが「今」になってしまう、という考え方の奇妙さ。（中略）

時間の不思議さは、過去が決して改変できない単線であるのに、未来には無数の選択がありうると考えられてしまう点にもあらわれる。「今」を折り目にした、過去と未来の非対称性。》（作家　大岡玲書評『タイムトラベルの哲学』02・2・10付毎日）

- 《記憶にはいろいろな種類のものがある。たとえば過去のある出来事を現在の時点で思い出せるというのも記憶だし、過去に覚え込んだ知識や能力が身について、それをいつでも利用できるというのも記憶の一種である。

そういった記憶はすべて、過去が消えてしまわずに現在まで残っているということを意味している。そしてそこには、時間は過去から未来に向かって進むものだというイメージが強くはたらいっている。これは時計の針の進み方といっしょだ。

しかし時間の向きには、それと反対のイメージの仕方もあるのではないか。「まだ来ない」未来から「現にある」現在を通して、過去へ向かって「過ぎ去る」というイメージである。私にはどうやら、そっちのほうが時間を生きるという生き方にふさわしいように思われる。

その場合だと記憶はどうなるだろう。（…）時間を生きるというのは現在を生きるということである。私がそうやって生きている現在の底のほうに、過去へ向かって過ぎ去ってしまわない記憶という層が含まれていて、それが現在の厚みになっているということではないのか。

この現在の層の厚さは、過去の思い出だけでなく未来の予想にも反映するだろう。年をとって忘れっぽくなると、どうやら過去だけでなく未来も痩せてくるようだ。》(精神科医 木村敏「記憶」03・3・6付朝日)

明白なのは、我々にあるのは「今ここ」だけであって、過去もなければ未来もないということだ。しかし、「今ここ」を生きるということは、「今ここ」に凝縮されている過去も未来も生きるということにほかならない。もしそう考えるなら、「今ここ」は過去と未来の交差点ということになる。過去のない現在も、未来のない現在もないということだ。「現在の層の厚さ」とはしたがって、過去が現在にむかって殺到してくる量の多さの分だけ、未来に踏み込んでしまっている現在の手応えの強さなのかもしれない。

●《「あの時こんなことがあった」と、はっきりと想起できる「思い出」は、あくまでも体験することの、ほんの一部だけである。脳の中に痕跡として残る記憶のほとんどは、「思い出せない記憶」として収納されている。それらの膨大な無意識の記憶のほんの一部分だけが、意識の中でははっきりと捉えられる思い出として、よみがえってくるのである。

記憶のほとんどが思い出せないものであるということは、とりわけ、大人が子どもに接することの意味を考える上で大切な示唆を与える。大人は子どもは ^{ほとんど} 殆ど^{ほとんど}のことを思い出せないということを前提に、何かを伝えて行くべきなのである。》

《親や教師は時折、子どもたちが自分たちのことを将来、どれくらい思い出すのだろうかと考えて、寂しく感じるものである。確かに、自分の体験をふり返っても、学校の授業で「あんなことがあった」と思い出せたり、幼少期に「親があんなことを言った」とはっきりと想起できることは、ごくわずかである。

それでも、私たち一人一人は、間違いなく、親や教師が与えてくれた無数の「思い出せない記憶」によって支えられている。それが記憶の地層の奥深くにひっそりとしまわれているものであればあるほど、私たちの人生観、生き方は有形無形の深い影響を受けるのである。

子どもたちは、「ありがとう」を言わずに大きくなって行き、やがて巣立って行く。それは寂しいことではあるが、子どもたちの脳に刻み込まれた「思い出せない記憶」は、必ず人生の支えになるはずなのである。》(脳科学者 茂木健一郎「思い出せない記憶よ、ありがとう」『読売ウィークリー』05・8・14)

●《時空の端、つまり境界をどのように決定すべきか。私たちが過ぎ去るのを感じる実時間に直交する虚時間を導入することで、この困難を克服したM理論》を提唱した物理学者のスティーブン・ホーキング。《「M」は英語の膜(membrane)の頭文字からとったもので、宇宙で生じるあらゆる出来事が多次元時空の膜、その表面上に限定されているという意味が込められている。M理論では、空間は9もしくは10の次元を持ち、私たちが普通に理解している3次元のみが大きくほぼ平らで、6ないし7つの方向は小さく巻き上げられている。また、虚時間の最も簡単なモデルは4次元の表面を持つ球であるという。この虚時間が私たちの経験する実時間での宇宙の歴史を決定しているというのだ。》(『週刊朝日』01・11・30) 2005年9月11日記

